

ちに道を広めるという事であり、ます』と御教示下さいました。

一つ目は、心のほこりをはらう事

二つ目は、おつとめを勤める事

三つ目は、おさづけを使わせる事

私は、この三つが陽気ぐらしを味わう材料、つまり料理に例えますと、どれ一つ欠かす事の出来ない具材に思えたのです。例えば、みそ汁を作ろうと思った時、何はなくとも必要なのは水でありましょう。又、味噌が無ければ味気ないでしょうし、その汁に入れる具が無ければ、美味しいみそ汁を味わう事は出来ないと思います。

このよふハあくしまじりであるからに いんねんつける事ハいかんで 一—62

この世は、埃まみれの世界であり、悪いんねんを積みやすい世の中ではないかと思うのです。こうした中でも、お教え頂く私たちの信仰生活は、日々、月々のおつとめを親の心に沿ってしっかり勤めさせて頂く事で、心に溜まった埃

を掃除させて頂き、真綿のような心でおさづけを取り次がせて頂くところに、親神様がようばくに入り込んで下さり、不思議な自由の御守護をお見せ下さるように思います。

たんくくとよふぼくにてハ

このよふを はしめたをやがみな入こむで 十五—60

このよふをはじめたをやか入こめば どんな事をばするやしれんで 十五—61

とお聞かせ下さいませ。

ご承知の通り、ようばくになる為には、「別席」を9席運ぶ必要があります。又、この「別席」のお話は、私たち人間のふる里である「おぢば」でしか聞く事が出来ません。言わば尊い親神様のお話であり、運命の切り替える事が出来る有難い理のお話だと思っております。

只今、大教会の活動方針となつております初席者104名・中席者280名の御守護を頂く為には、私たちようばく一人ひとり「おぢばがえり」の尊さや有難さをより一層深めて実践し、おぢばから頂いた喜びを家族や友人、職場の方々に、自分の身の周りの方々に、

もつともつと広めていく事が肝心だと思えます。

先日、あるご婦人の信者さんに「あなたは何故おぢばがえりをしますか？」と尋ねました。皆さんならどう答えますか？そのご婦人さんは、少し考えられて、「これといつて理由はないですが、おぢばに帰ると心がスーッとすらからだと思えます」と答えて下さいました。

なんどきにかいりてきてもめへくの 心あるとハさらにをもうな 十一—78

とありますように、おぢばがえりは、めいめいの人間心で帰ってくるのではなく、親神様のお手引きを頂いて帰らせて頂けるものと拝察させて頂きます。

おぢばは、親神様がお鎮まり下さる所であり、ご存命の

教祖がおられる所でもあります。おぢばは人類のふるさとなのです。そして、教祖は、最初に人間産まれ出しの時、母親のお役目をお勤め下さった尊い魂の御方様であります。その親々にお会いしに行く事が「おぢばがえり」であり、を

やに会いに行くのに理由など

いるはずがないと思うのです。「おぢばがえり」は、私たち信者が、欠かすことのできない「親孝行」という行為であり、一度でも多くこの行為を実行する事で、をやに御安心頂き、をやにお喜び頂くことで、沢山の恵み御守護を頂戴出来るものと思えます。しかしながら、中々諸々の事情が重なり、おぢばに帰れないという方も少なくないと思

います。

明治7年頃、信仰を始めた増井りん先生(当時32歳)は、大阪河内からおぢばがえりを熱心にされていたそうです。

ある年の正月10日、その日は朝から大雪でした。行く途中、欄干のない橋に着いた頃には、大雪に風が加わり橋の上には雪が積もっていたそうです。

先生は、裸足になつて這つて橋を渡ろうとしました。途中、大風に身体をおおられ、川の中に落ちそうになりました。

その度に、「なむてんりわうのみこと」なむてんりわうのみことと唱えてやつとの思

いで橋を渡り切られたそうです。この時、お屋敷で教祖が窓から外を御眺めになつて、

『まあまあ、こんな日にも人が来る。なんと誠の人やなあ。ああ、難儀やろうなあ。』と仰せられて、おりん先生の冷え切った手を、両方のお手でしっかりと握り下された、とお聞かせ頂きます。

私は、もしこの場に自分が居合わせたら、一体どんな気持ちになるだろうか、又、おりん先生はどれほど感慨無量

が来る。なんと誠の人やなあ。ああ、難儀やろうなあ。』と仰せられて、おりん先生の冷え切った手を、両方のお手でしっかりと握り下された、とお聞かせ頂きます。

私は、もしこの場に自分が居合わせたら、一体どんな気持ちになるだろうか、又、おりん先生はどれほど感慨無量

『まあまあ、こんな日にも人が来る。なんと誠の人やなあ。ああ、難儀やろうなあ。』と仰せられていたそうです。河内半川現在の距離にすると約30キロあり、大人が歩くと7時間半程かかる距離です。今のような防寒具もなく、大雪で風の強い中を7時間以上歩けば、手足はカチカチに凍えておられたことと想像します。

その日の夕方16時頃、おりん先生はおぢばに帰られました。すぐにご挨拶に上がると、教祖は、『ようこそ帰ってきたなあ。親神が手を引いて連れて帰ったのやで。あちらにてもこちらにても滑つて、難儀やつたなあ。その中にて喜んでいたなあ。さあ、親神が十分々々受け取るで。どんなことも皆受け取る。守護するで。楽しめ、楽しめ、楽しんで。』と仰せられて、おりん先生の冷え切った手を、両方のお手でしっかりと握り下された、とお聞かせ頂きます。

私は、もしこの場に自分が居合わせたら、一体どんな気持ちになるだろうか、又、おりん先生はどれほど感慨無量

が来る。なんと誠の人やなあ。ああ、難儀やろうなあ。』と仰せられて、おりん先生の冷え切った手を、両方のお手でしっかりと握り下された、とお聞かせ頂きます。

私は、もしこの場に自分が居合わせたら、一体どんな気持ちになるだろうか、又、おりん先生はどれほど感慨無量

が来る。なんと誠の人やなあ。ああ、難儀やろうなあ。』と仰せられて、おりん先生の冷え切った手を、両方のお手でしっかりと握り下された、とお聞かせ頂きます。

私は、もしこの場に自分が居合わせたら、一体どんな気持ちになるだろうか、又、おりん先生はどれほど感慨無量

が来る。なんと誠の人やなあ。ああ、難儀やろうなあ。』と仰せられて、おりん先生の冷え切った手を、両方のお手でしっかりと握り下された、とお聞かせ頂きます。